

INFORMATION AND KNOWLEDGE NEWS

情報知識学会ニュースレター

1992 6.1

14

情報知識学会事務局 発行 〒101 東京都千代田区和泉町1番地(凸版印刷株内) TEL03(3835)5550 FAX03(3839)6061 ISSN0915 1133

キーワードのいらないデータサービス

(株) 三菱総合研究所 情報サービス部長 柳沢賢一郎

いま、パソコン通信をやる人がすさまじいスピードで増えている。NIFTY-Serve や PC-VAN といった代表的なパソコン通信ネットワークでは、会員数が 30 万人をこえてなお増えつづけている。パソコンは、いまや一般大衆のコミュニケーションの道具の一つになりつつある。

こうしたパソコン通信ネットワークには、データベースのサービスを提供しているものが増えしており、これが結構つかわれている。データベースは、もはや企業が情報収集するための道具ばかりではなく、一般大衆の情報収集のための手段となりつつある。いずれ、どこ家庭にもパソコンがあつて、だれもがパソコン通信でデータベースにアクセスしてさまざまな情報を得られるような社会が来るにちがいない。

だが、そうなるためには重大なボトルネックを解決しなければならない。それは、「キーワード」である。これがくせ者で、適切なキーワードをつかわないとなかなか情報がヒットしない。だから、代行検索というようなプロの世界が存在するのだ。これでは、データベースが一般大衆の情報収集の道具になるにはほど遠い。

コンピュータがこの世に生まれてから 50 年になろうとしているが、最新の超高速の大型コンピュータでも、基本的には人間の命令したことしかできない。ものごとを推論したり、情報を並列処理したり、あいまいな情報を扱ったり、学習したりすることは、まったく苦手である。

この壁をブチ破るものとして期待されているのが、ファジー・コンピュータとニューロ・コンピュータと超々スーパー・コンピュータである。これらのコンピュータが合体すると、いまでは想像もつかないような、高度で人間に近い情報処理ができるし、自動化がきわめて進んで世の中が様変わりする。

データベースも、キーワードなどはいらなくなる。知りたいことを話しことばや手書きの文章や図で入力してやれば、コンピュータはその意味を正確に解釈して、ほしい情報を出力してくれる。90 年代の後半か 21 世紀の頭になれば、こうした次世代コンピュータで、キーワードなしのデータベースが実用化しているだろう。

目 次

巻頭言	1
情報知識学会通信	2
「フォーラム・報告」	3
研究集会「歴史研究と電算機利用の可能性」の開催報告	4
SGML PLUS について	6
学会カレンダー	10
ビジネス先端リポート「ドキュメントの可読性と品質要件」	11
HPP カンファレンス	14
人文科学とコンピュータ研究会	15
編集後記	16

情報知識学会通信

情報知識学会に入会をご希望の方は、このフォームをコピーして必要事項を御記入の上、事務局に郵送、又は F a x で御送り下さい。折返し入会案内、入会申し込み書等の書類をお送り致します。（現在入会金は1,000円、年会費は5,000円です。）なお現在ニューズレターがあります。ご希望の方はお知らせ下さい。

F a x : 0 3 (3 8 3 9) 6 0 6 1

〒101 東京都千代田区和泉1番地（凸版印刷内）

情報知識学会事務局 担当 斉藤 行

情報知識学会に入会したいので必要な書類を御送り下さい。

個人用 法人用 （どちらかを丸で囲んで下さい）

住所：〒

(フリガナ)

氏名：

電話：

Fax ：

「フォーラム・報告」

神奈川大学知識情報研究所所長

藤原鎮男

当研究所の1991年度最後のフォーラムが別記プログラムにより行われた。冒頭、会場を提供された東京大学先端科学技術研究センター側として、センター長大須賀節男教授が開会の挨拶をされ、ついで、別記プログラムに従って講演が行われた。

まず藤原（鎮）が企画者の立場から、このフォーラムの目的を述べ、これは、情報と知識の結合の意義を鮮明にすることを企画のモチーフとするものであり、具体的には、科学技術庁の科学技術振興調整費によって行われた研究、a) 化合物情報データベースの構築とそのネットワーク化（1979－1985）と、b) 「化学物質設計等支援のための知識ベースシステムに関する研究」の経験と結果の紹介を行うことを目的とし、この研究における直接、間接の経験によるものであること。そして、知識とシステムの融合と、協力が情報応用の鍵であり、今後の社会の最重要事であると考えられること。当研究所が、この数年来研究所のフォーラムの主題に「ゲートキーパーの機能の振興」をとりあげたのも同じ主旨によるものであることを述べ、この主旨が内外の支持を得つゝあり、当研究所のフォーラムに講師として参加された Dosa (USA) 教授と Wormell (Denmark) 教授がユネスコの企画をすすめており、また同 Farkas - Conn 博士 (USA) が FID (国際情報トクメンテーション連盟) 産業情報部会幹事として、同主題の会議を本年3月ワシントンで開催した

ことを紹介した。そして、情報と知識の連繫の上で最も肝要な用語の整備に関する自身の研究の成果を紹介した。ついで、大須賀教授は冒頭、本フォーラムの主題の意義を強調された上、b) の研究において、同教授が鋭意努力してつくられた異種多分野を結合するトータルシステムを紹介され、企業も含め、今後の社会の発展の鍵を握るものは、知識と情報の融合であり、それも、要素の機能を、有効に統合するモデルをつくり、それによって実際の運営をすることであると述べられ、甚だ示唆に富む有益な講演であった。高橋助教授は、システムと合成化学の両面に立つ研究者として、実際に有用な化合物の設計を遂行された経験を述べられた。さらに、藤原筑波大教授は、a)、b) を通ずる基盤整備として化合物辞書、反応データベースの構築及びその利用のシステム化を実行し、「化学知識のシステム化」を果たした成果を述べられた。閉会の辞には主催者側の一員として、情報知識学会副会長の月見里禮次郎氏が情報応用の時代の活動の意義を熱を込めて述べられた。

本フォーラムは、情報科学ないし化学の最新の研究課題への取り組みの成果を紹介することはもちろんながら、それよりさらに進んで、'伝統の専門学術の知識と情報科学の力の融合をいかにして実現するか'という現下の科学技術の課題に対して、それに本格的に取り組んだ実験例を紹介した意義を持ったものと考えられる。学界、産業界にわたり広範な

年令層の百人を超える参会者があり盛会であった。本学会、東京大学先端科学技術研究セ

ンターに対し、共催の御後援を深謝する。

プログラム

主題「知識（専門）と情報（技術）の結合による価値の創出

:化学物質設計等支援のための知識ベースシステムの構築」

日時 平成4年3月6日（金）

所 東京大学先端科学研究所 東京都目黒区駒場4-6-1

講師ならびに演題

1 化学における知識と情報の結合のための条件:locality と genrality の融合

:基本用語策定, 辞書作成, ネットワーク共用による化学情報の高度利用, 物質設計 支援知識

ベースシステム構築 神奈川大学知識情報研究所長 藤原鎮男

2 知識ベース統合システムの設計 東京大学先端科学研究センター長 大須賀節雄

3 化合物構造設計 豊橋技術科学大学助教授 高橋由雅

4 化学反応設計 筑波大学教授 藤原譲

共同主催 情報知識学会

東京大学先端科学研究所

神奈川大学知識情報研究所

研究集会「歴史研究と電算機利用の可能性」の開催報告

日本女子大学文学部

永村 真

1991年9月21・22日、情報知識学会主催の研究集会「歴史研究と電算機利用の可能性」が、千代田区神田駿河台の中央大学駿河台記念館において開催された。いささか遅きに過ぎた感もあるが、紙面を借りて研究集会の概要について報告したい。

本研究集会は、情報知識学会の人文・社会科学系部会長である安沢秀一氏の提案により企画されたもので、福武学術文化振興財団の援助と、日本電気・タウ技研株式会社の協力をうけ、永村を実務担当者として開催された。開催の意図とは、歴史研究における電算機利

用にかかわる情報や知識を、実務者に比してその機会にめぐまれない大学院生諸氏とわかちあおうというものである。欧米ではすでに20年以前より大学院教育のカリキュラムに電算機利用が組込まれており、また日本史史料をデータベース化し（ただし英文で）研究に活用する欧米の日本研究者も少なくない。これらと比較するならば、日本の大学院における電算機利用技術の教育や情報交換は、著しく立後れていると言わざるをえない。そこで大学院教育の不備を補い、個人的な範囲にとどまっている利用技術の情報を交換する場を提供するために、今回の集会が企画されたわけである。

さて研究集会は、二日間にわたり延べ62名の大学院生と研究者の参加を得て開催されたが、その内容は以下に掲げる通り、学会動向に触れる基調報告、電算機活用の実践報告、そしてデータベース構築を促進するための機器（漢字OCR）の活用事例の報告とデモンストレーションから構成された。

1、安沢秀一「基調報告」

2、八重樫純樹・永村真「研究機関における電算機活用の現状」

3、村越一哲（慶大院）「大名家臣の系図分析におけるパソコンの利用」

4、五島敏芳（学習院大）「歴史研究の作業環境の整備」

5、永村・大槻豊寛（タウ技研）「漢字OCR装置の紹介とデモンストレーション」

6、桜井昭男（多摩市史編纂室）「多摩市史

の目録作成とパソコン」

7、荒巻喜光（大正大院）「テキストファイルを利用したデータの応用について」

8、佐藤正広（一橋大経済研）・柴田貴行（横国大院）「自治体史編纂とパソコン」

9、保坂祐興（学習院大史料館）「パソコンによる歴史資料目録作成の一事例」

主催者側による1・2・5を除く6件の報告は、その内容から歴史研究におけるパソコン利用に関するもの、史料や文献データの処理自体に関するものに大別され、また処理対象は日本史史料のテキスト・文献データと数値データにわたり、いずれも報告者自身の試行錯誤にもとづく実践事例として説得力をもつものであった。一方参加者の多くは機器活用の経験や意思をもつことから、報告者との間での活発な討論がおこなわれ、本研究集会は当初の目的を一応果たし得たと考えられる。

報告と討論では、活用経験を通して確認された歴史研究における電算機利用に必須の課題として、漢字字種の拡張、入力データの信頼性の確保、史料データの自然語検索を実現するための条件、蓄積データの有効利用のための索引編成方法、データ交換の標準化等が提起された。急速なハード・ソフトの技術革新のなかで、歴史研究の立場からこれらの課題を解決するための具体的な研究と開発の必要性、そして継続的な情報交換の場への要望を再確認したことが、本研究集会の最大の成果といえようか。

SGML PLUS について

坂 東 達 夫

松下電送株式会社 技術研究所

1 はじめに

SGML の有効性についてあえて本稿では触れないが、国内においてその普及が欧米にくらべ遅れている要因として次のような点が考えられる。

- (1) 文書のマーク付けが容易ではなく、SGML 文書作成のネックになっている。
- (2) SGML 文書を活用するための有効な処理系が少なく SGML 化する恩恵が享受できない。

SGML PLUS はこれらの要求に応える日本語 SGML ソフトウェアであり、本稿で本ソフトウェアの概要とその応用例についてしめすものである。

2 SGML PLUS の特長

SGML PLUS は既に販売している MJSE-90 の機能拡張版として位置付けられる。MJSE-90 は、

- (1) シンボリックなタグ表示により、SGML の知識がなくても完全な SGML 文書の作成が容易にできる。
- (2) 章、節など文書のアウトライン構造を視覚的にとらえることができる。
- (3) 既存の MS-DOS テキストファイルより文書入力が可能である。

といった特長を有しており、国内初の SGML 対応ソフトとして評価を得た。SGML PLUS はさらに要望の高い機能を付加するべく次の改良を加えた。

- (1) SGML の文法サポート構文を拡張した。(特に属性編集機能など)
- (2) LaTeX への変換機能をサポートした。

これらの機能拡張により、特に組版処理系への連結が十分はたせることとなった。表 1 に MJSE-90 より SGML PLUS の拡張機能一覧をしめす。

3 SGML PLUS の応用

それでは具体的な SGML PLUS の応用として、本稿の作成そのものの制作過程を示す。組

表 1 SGML PLUS の拡張機能一覧表

メニュー	内容
LaTeX 出力	LaTeX コマンド付き文書ファイルを出力する。
テキスト出力	タグを除いたテキストファイルを出力する。
印刷	タグを除いたテキストを印刷する。
属性編集	属性値の入力を行う。
コメント挿入	文書内容と別にコメントを挿入する。
命令挿入	システム固有の命令を挿入する。
マーク区間挿入	文字列の有効、無効等を指示するマークを挿入する。
マーク区間定義	マーク区間の文字列が有効か無効か等の定義を行う。
外部ファイル挿入	画像等の外部実体を挿入する。
外部ファイル定義	外部実体のファイル名、記法等を表示する。
タグ未表示	タグを除いたテキストを表示する。
フルメニュー表示	SGML 特有のメニューの表示、未表示を選択する。

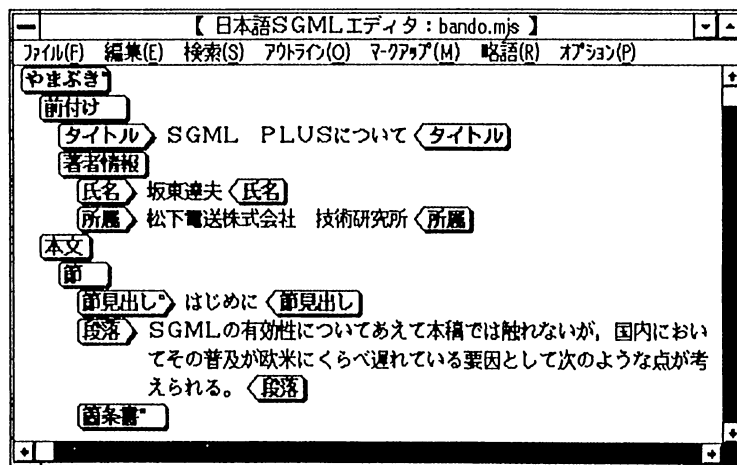


図 1 文書入力例

版処理は大日本印刷、岩波書店の開発による「やまぶき」を用いた。

(a) 文書入力

SGML PLUS にやまぶき文書交換用の DTD (文書型定義) を選択し、その文書構造に文書を直接入力する。図 1 に DTD と SGML PLUS の表示画面例を示す。

(b) 表入力、図入力

本稿の表 1 はやまぶきの表に対応するため、図 2 のようなマーク付けを行う。図は SGML PLUS の入力時には枠あけのための情報を属性編集機能を用いて、図 3 のように入

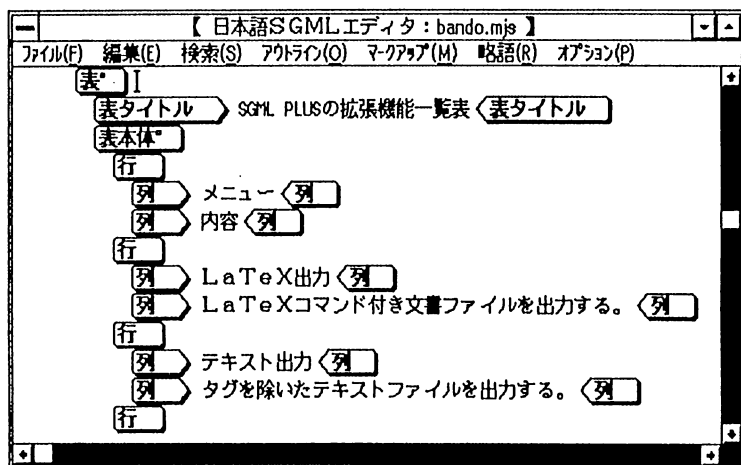


図2 表入力例

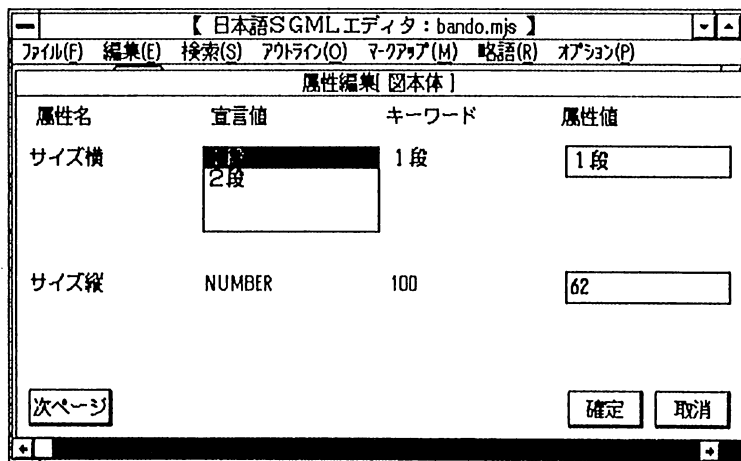


図3 図の属性編集例

力する。図の実体は最終版下において貼り付けをおこなった。

(c) 組版

SGML PLUS において作成した文書をやまぶき変換バックにより、やまぶき文書に変換し、やまぶきにて読み込むと本稿のようになる。レポートというレイアウトの指定は SGML PLUS の属性編集にて指示されたものである。これ以降の編集作業はやまぶきの WYSIWYG の高度な編集機能によって行われる。

この一連の過程で本稿が仕上がったわけだが、著者の入力段階においてレイアウトを全く気にすることなく、高品位文書ができる効率の良さが読者の方につた伝えれば幸いである。

本稿では組版処理を中心に SGML PLUS についての概要を述べたが、データベースなどの電子文書処理においても SGML PLUS は有効であり、広く活用されることを期待する。

参考文献

- [1] 日本語 SGML エディタ SGML PLUS 基本操作マニュアル
- [2] SGML PLUS 用 DTD コンパイラ操作マニュアル
- [3] 坂東達夫:電子文書処理効率化への鍵にぎる SGML 画像技術情報, No21, p3 (1990)
- [4] 豊田清:SGML 文書構造エディタ National Technical Report Vol. 36 No. 5 October 1990

役に立たないミニ情報 (2)

CD

金融業界では譲渡性預金や現金自動支払い機の意味で使用されているが、コンピュータ業界では、もっぱらクリスチャン・ディオールの略として使われている。最近コンパクト・ディスクの意味でも使われ始めているが音楽業界程には一般的ではない。(プロディガル)

学会カレンダー (Ver.3.0, '92)

18th IASSIST Conference, International Association for Social Science

Information Service And Technology, 1992, 5, 26-29

Contact : Iona Einowski, UC. Berkeley

Tel: 01-510-642-6571, E-mail: census85@ucbmsa.bitnet

Computer Across the Curriculum, Mariott Financial Center Hotel, New York

1992, 5, 29-31, Contact: Max Kirsch, Tel (212) 541-0324

情報処理学会「人文科学とコンピュータ」、京都大学文学部博物館、1992, 6, 5

(プログラム等の詳細は本号掲載頁を参照して下さい)

ICCAL Computers and Learning), Canada, 1992, 6, 17-20

Contact: Dr. Ivan Tomek, Acadia University,

Tel: (902) 542-2201, Fax: (902) 542-7224

第6回 人工知能学会、学習院大学、1992, 6, 23-26,

Contact: 事務局 (Tel: 03(3433)2543)

International Conference on Fifth Generation Computer Systems, Tokyo, 1992, 6, 1-5 TMI-92,

4th International Conference on Theoretical and Methodological Issues

in Machine Translation, Montreal, Canada, 1992, 6, 18-20

Contact: Denis Dufresne, Tel (514) 682-3400, Fax (514) 686-1990

30th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics,

University of Delaware, 1992, 6, 28-7.2,

Call for Papers: Contact James A. Wilderotter II (Georgetown University)

(Tel: 202-687-6096, BITNET: WILDER@Guvax)

The Hartlib Papers Project International Conference; PEACE, UNIFICATION, AND PROS-

PERITY--The advancement of learning in the 17th century,

University of Sheffield, 1992.7, 6-8: E-Mail EG1HAR@primea.sheffield.ac.uk

IEEE Int'l. Conf. on Robot and Human Communication, 法政大学, 1992, 9, 1-3

Seminar held by ICSSID, 1992.9, 7-14,

詳細及び問い合わせ先: 一橋大学経済研究所 (松田芳郎: Tel (0425) 72-1670、

Fax (0425) 75-4856)

情報処理学会「人文科学とコンピュータ」、国立教育研究所, 1992, 9, 11

問い合わせ先: 日本IBM (株) 東京基礎研究所 (洪 政国: Tel (03) 3288-8280,

Fax (03) 3265-4251)

2nd International Conference & Exhibition on Computer Applications to Materials

and Molecular Science and Engineering (CAMSE '92), Yokohama, 1992, 9, 22-25

Call for papers (deadline 1992, 2, 29)

5th Irish Conference on Artificial Intelligence and Cognitive Science

University of Limerick, Ireland, 1992, 9, 10-11

Contact: aics92@ul.ie

情報知能学会総会 1992, 9, 17, (詳細は「I & K ニュース」次号に掲載予定)

Conference on Computational Lexicography and Text Research, Budapest, 1992, 10, 4-8

Contact: Hungarian Academy of Sciences, Institute of Linguistics, Budapest, P.O.
Box 19, 1250 Hungary

ドキュメントの可読性と品質要件

大日本印刷(株)

江成 保徳

(前号のつづき)

3.4.1 隣接する文字間の関係

通常の日本語ワープロでは文字は全角、半角の2種類でありスペース制御もこれに準じているためこの問題を論ずる以前の状態であるが、組版の世界では明治の時代から可読性を意識した隣接文字間の調整を行っている。欧文のプロポーショナルスペーシングやカーニング、さらには和文と数字や欧文の文字間、記号・約物などの連続時のアケ／ツメなどがこれに該当する。

活字組版の世界では物理的な制約であける方向に調整するわけであるが、通常そのためのスペースとして全角、2分、4分を用いる。さらに微調整を要する時にはトタン、最後は紙を用いることまでする。

写植の世界では逆に詰め打ち手法も用いる。

3.4.2 一行の文字列の編集

実際に組版をする上で最も負荷の大きい部分がこの行の編集である。規則正しさを基本とする組版の大原則は、設定行長に合わせて強制改行以外の行は行頭、行末を揃えることであり、そのため一行中に全角倍数以外の幅を持つ文字が混在したり、途中で文字サイズの部分変更があった場合などは適切な箇所での字間調整が必要となる。

また、禁則対象行においても同様の調整を行う。欧文というジャスティフィケーションであるが、日本語組版には欧文にはないルビ処理など存在し、かつ近年ますます多国籍語の混在のケースも増えてきており、複雑さをましてきている。

(現在、事務文書レベルでの行組版規則のJIS 化作業が進んでいる。)

3.4.3 和欧文

和文と欧文は活字ボディの違い(正方形、長方形)もさることながらベースラインの考え方も違う。しかも欧文には大文字、小文字がある。したがって和欧文が混じる組版では大きさのバランス、並びのバランスをとるのが非常に難しい。

そのため組版サイドで同じポイントであっても和文と調和のとれた欧文文字面のフォントを用意したり、ベースラインの調整を行って見た目の違和感のないような工夫をしている。

3.4.4 行取り

見出し、図版・写真スペースのように、基本割り付けの1行を越える領域をとる場合は基本行の倍数指定による行取りが原則である。これも規則正しい組版の実現のための必要条件である。

活字組版の場合は活字、インテルなど組版のための様々な材料があるが、すべて物理的な大きさ、幅がありどんな寸法の組立も自由におこなえるわけではない。このことは組版の自由度の制約につながるとも言えるが、逆にこの制約のおかげでスタンダードが形成され、工業化が実現し、整然とした組版の世界が生まれた。

このような背景を考えると、適当なその場に合った1.2行取りや2.8行取りのような指定は全体のバランスを崩すことはあっても、決してよい結果をもたらすものではないことが分かる。

たとえ無理に中途半端な行取りをしても結局どこかでもとの割り付けにもどす調整が必要となる。

また整数倍の行取りにはもうひとつの意味がある。

本のような形式で印刷することは裏表に印刷されるわけで、紙質にもよるが通常用の紙では裏の印字部分が透けて写る。(裏うつり)

したがって行間の余白を紙の白さに依存する以上、できるだけ全頁を通して印字行の位置を合わせる必要があり、そのような意味でも整数倍の行取りの必要性が生まれる。

最近のDTPなど、行間変更や調整が比較的自由に行えるようになっているが、不必要に多用すべきではない。

3.4.5 その他

数式、表組などの特殊な組版(*)についても言及する必要があるだろうが全体を通じては、造本という広い観点で用紙、印刷方式、製本方式などを考慮した、手にとって読みたくなるような本作りの意識が送り手側には必要である。

(*) スタンフォード大学の著名な数学者であるクヌース教授が作成したTeX(テフと読む)が極めてすぐれている。

4. ドキュメント作成のプロセスと必要条件

オフィス・ドキュメントから出版物にいたるまで、下図のプロセスがあり、各々にたずさわる人とその役割分担がある。

前述のように出版・印刷の世界ではかなり明確に仕組みが出来上がっており、多くの人間の共同作業で一冊の本が製作される。

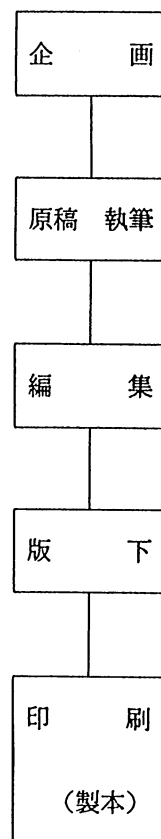
これに対して、ワープロ、DTPはひとりで全てをこなせることが特徴であり、何となくできるのではないか、という錯覚におちいって紙の洪水をもたらしている。

ペーパーコミュニケーションが豊かになることは悪いことではないが読む側のことを考えたドキュメント作りを考えるならば、もっと出版・印刷のノウハウを吸収したほうがお互いの幸福につながる。

しかしながら、このノウハウは経験的な要素も多く、あまり深入りすると本来の仕事に影響しかねない。

ただ、交通規則の赤信号は渡らないくらいの最低限のルールを身につけることは必要であろう。

それ以上のドライビングテクニックは本来システム側の役割ではないかと思う。



(次号に続く)

**The Hartlib Papers Project
University of Sheffield**

**PEACE, UNIFICATION, AND PROSPERITY
The advancement of learning in the 17th century**

6-8 July 1992

The conference begins after lunch on Monday 6 July (registration from 11.00). Formal proceedings end late on the evening of Wednesday 8 July, and checkout will be after breakfast the next morning. The conference will be held in the university's Earnshaw Hall in the pleasant Sheffield suburb of Broomhill. Accommodation, meetings and meals will be held there, as will a book display.

The conference consists of four plenaries with a series of parallel of sub-sessions. Plenary sessions include Barbara Lewalski on Milton and Hartlib (educational projects and epic paideia); Jan Kumpers on the political thought of Comenius; David Norbrook on Andrew Marvell and John Hall in the 1640s; Richard Popkin on Anglo-Jewish thought; Charles Webster on engineering for total reform. Other plenary speakers include Dagmar Capkova, John Dixon Hunt, and Blair Worden.

Subjects covered in the sub-sessions include Francis Bacon and the advancement of learning; the politics of literacy; rhetoric and women's education; Robert Boyle and millenarianism; Milton in the Hartlib circle; the Oxford Philosophical Club and economic thought; William Harvey and the revolution of the blood; colonialism in Ireland and Virginia; education in reformed Europe (Ramus, Alsted, Comenius, and Ratke); science and utopia in Germany; the fall and redemption of nature; optics and music; rethinking the epic; the French intelligencers (Ménage and Peiresc); closed and open languages; intellectual property and the selling of secrets; educational reform in England and the colonies (Hartlib, John Hall, and John Eliot); the Hartlib circle and oriental learning; Cowley, Davenant, and Interregnum theatre; irenicism; Benjamin Worsley's natural philosophy; Hartlib and the stranger churches; William Gellibrand and magnetic philosophy; the reform of logic and method; the Dutch Collegiants and England; John Evelyn and the construction of the scientific self; Milton and the horizons of knowledge; medical reform; the ideology of urban cleansing; the authority of conscience; the character and uses of archives (examples include Boyle, Hartlib, Weckherlin, and Aubrey).

There will be a number of additional events. These include a civic reception hosted by the Lord Mayor on the Monday night; visits to local sites of interest such as Chatsworth House, Haddon Hall, and Bolsover Castle; a conference dinner on Wednesday evening; and the first British performance of *Vivat Comenius* (a musical account of the philosopher's life and work). It will also be possible to visit the Hartlib Papers Project and the University Library, where an exhibition relating to Hartlib and Comenius will be displayed.

Please address enquiries to:

HPP Conference, Hartlib Papers Project,
University of Sheffield,
Sheffield S10 2TN, UK

Tel: (0742) 768555 ext 4807 Fax: (0742) 739826
E-Mail: Hartlib@UK.AC.SHEFFIELD.PRIMEA

第14回 人文科学とコンピュータ研究会 (発表件数: 7件)

日時 平成4年6月5日(金) 午前10時～午後5時

会場 京都大学 文学部博物館 3階 講演室

[京都市左京区吉田本町:市バス百万遍下車(JR京都駅からの場合,地下鉄今出川駅下車,市バス乗換),百万遍交差点より南へ約100m下がる東側. Tel: 075-753-2721]

演題

10:00 ~ 12:00

(1) 移動窓法(moving window法)による読み(reading)の研究

芋阪直行(京大)

[概要] パソコンとアイカメラを連動させた移動窓法による読みの実験を紹介する。

(2) 舞踊譜 Labanotation による人間の身体運動の入力

高地泰浩, 八村広三郎, 英保 茂(京大)

[概要] X Window 上に実装した Labanotation エディタにより, 人間の身体の動きを対話的に入力し, 表示する。

(3) Computerbased Analysis of Symmetrical Properties of Weavings

Johann Stockinger (ウィーン大)

[概要] 結晶学の手法にもとづいて, 織物のパターンを記述し分類するためのプログラムについて述べる。

14:00 ~ 17:00

(4) ビデオによる古文書の効率的画像入力法

柴山 守(大阪国際大), 星野 聰(京大)

[概要] ビデオ・カメラによる古文書の分割入力とWS上でのJPEG圧縮・伸張, 接続処理について述べる。

(5) 電子計算機および電子印刷用の標準漢字字形の開発

勝村哲也, 丹羽正之(京大)

[概要] 漢字処理に関する問題を解決すべく漢字の標準字形を開発中。異体字問題や文字不足の解消が目標。

(6) 画像処理による節用集(日用百科書)の使用実態の分析

横山俊夫(京大), 小島三弘, 杉田繁治(民博)

[概要] 工業化前の総合礼法書群について手垢を画像処理し, 多変量解析の手法で分類, 新たな文明像を構想する。

(7) 知的生産支援システム Wadaman の開発

宗森純, 上床美佐和, 和田満, 長澤庸二(鹿児島大)

[概要] 計算機上に技術カードシステムを実装し, これを用いて報告書の作成等を可能にした。

17:00~17:40

見学: 京大 大型計算機センター (星野研究室)

* 研究会当日は, 京都大学文学部博物館春季企画展「近世の地図と測量術」の開催期間中ですので, 昼の休憩時間にはこの展示会の観覧ができます。

編集後記:

今回は三菱総合研究所(株)の柳沢様より貴重な巻頭言を頂戴いたしました。又松下電送の板東様には”SGML-PLUS”を紹介して戴きました。今後当学会の会員の皆様の「I&Kニューズ」への投稿に利用できるよう検討したいと思います。

「情報知識学会」が主催したセミナーと共同主催したフォーラムの報告も掲載することができました。「へー、情報知識学会はこんな活動もしているのか」と、びっくりなさった方も多いのではないのでしょうか。うれしいことに学会案内等の情報の提供も増えて参りました。執筆者も大学から企業の関係者と多彩です。

今後も沢山の皆様の御協力を賜りたいと思います。回りに未入会の方がいらっしやいましたら是非本学会を御紹介下さい。とりわけ「自分の研究や仕事に関係がないから」と、おことわりになる方に入会して戴きたいと思います。今や”YUTORI”の時代!!! 逆説的ですが直接の利益やメリットが無いからこそ、かえって広い視野に立って「情報とは何か?」を様々な分野の人々と一緒に考えることができるのではないのでしょうか。

本号はほとんどの原稿をフロッピーで頂戴することができました。又、先号に引続き岩波書店の宮内氏、並びに大日本印刷(株)の斉藤、馬場の両氏の御協力を得ることができました。厚く御礼申し上げます。

最後に連続原稿を頂戴しました大日本印刷(株)の江成様に紙面を借り深く感謝いたします。
(長瀬)
